トライアスロンの発展に関する一考察 - プロスポーツとしての可能性に着目して - A Study on the Development of Triathlon – Focusing on the Expectation of the Professional Sport-

1K10C343-5 林慶祐

主査 友添秀則先生

副査 原田宗彦先生

【本研究の目的と動機】

筆者は、大学入学と同時にトライアスロンに取り組むようになった。トライアスロンとは、スイム（水泳）・バイク（自転車競技）・ラン（長距離走）の三種目を連続して行う競技である。トライアスロンは、2000年に開催されたシドニーオリンピック大会より、オリンピック競技の正式種目として採用された。それ以降日本を含め各国で選手の強化が行われるようになった。

筆者自身、本種目の年代別の世界選手権や日本選手権への出場経験がある。その経験の中で、日本のトップ選手と接する機会が増えた中で感じたことがある。それは、現在の日本においてプロスポーツとしてトライアスロンを続けていくことは非常に困難な環境であるということである。そこで日本のトライアスロンの高度化を担う、プロスポーツとしてのトライアスロンという課題に関心を持った。本稿では、トライアスロンが強化・発展するための課題を、日本におけるトライアスロンが、プロスポーツとして成立していない環境にあると設定し、その要因を研究・考察し、トライアスロンの今後の発展の一助となる可能性について考察することを目的とする。

【本研究の方法】

本研究は筆者がトライアスロン界に参画したフィールドワークを基に、トライアスロンの知見を取り入れつつ、トライアスロン及びプロスポーツに関する書籍や論文を用いた文献研究である。特に、プロスポーツに関する文献、資料を主な考察対象に据える。

【第一章】

本章ではトライアスロンを理解するにあたって必要となる歴史や競技特性を研究し、トライアスロン独自の特徴を導き出した。また、現段階における世界と日本に関するトライアスロンに関する事例を述べ、現状を考察した。結果として以下の四点が明らかとなった。競技人口は着実に増加しており、今後一層拡大していくものとみられる点。単一種目とは違い独自の競技特性を持つ点。レース開催そのものに地域との結びつきを必要とする点。競技の高度化は進展しているが、その環境づくりが未発達のままである点。続いて第二章ではプロスポーツの意義や歴史、成立要素を述べる。

【第二章】

本章ではプロスポーツの誕生及び発展を調べ、プロスポーツの意義や成立要素について概観した。また、プロスポーツの経営形態についても述べた。その中で内海の論文（2003）より、プロスポーツ成立の違いからプロスポーツには二つの経営形態があることが明らかとなった。それは、イギリスのプロスポーツに代表される‘クラブ個人主義型経営’とアメリカのプロスポーツに代表される‘リーグ社会主義型経営’である。また、日本において現在プロスポーツとして成立しているプロ野球、Jリーグにおける経営形態を例にして日本におけるプロスポーツに必要な要素を抽出した。

【第三章】

本章ではプロスポーツが発展するうえで日本に必要な課題、要因を考察し、日本におけるプロスポーツとしてのトライアスロンが成立するうえで必要な課題について考察した。第一節では、前章のイギリス、アメリカのプロスポーツの成立の過程を例に、日本のスポーツのプロ化の歴史的背景及び課題と特徴を明らかにした。第二節では、日本におけるプロスポーツとしてのトライアスロンの経営形態について着目し、課題を述べた。第三節ではそれらを踏まえ、その中で、トライアスロンはプロスポーツとして成立する要素を満たしているが、それらをプロスポーツとして運営する基盤が未熟であることが課題としてあげられた。

【結章】

結章では、第三章まで考察してきた点を総括した上で日本におけるプロスポーツとしてのトライアスロンの発展に向けた提言を行った。前章の中で、プロスポーツとしてトライアスロンを運営、経営する基盤はまだ未熟であることが課題としてあげられたが、この点に関しては、本研究で行われた提案によって改善される可能性がある。今後は実際にこの提案をもとにした運営、経営に関する検討が為される必要がある。